

震災リゲイン

Press プレス

支え合い、備え、いのちをつなぐ

震災復興・防災情報専門メディア 全国4万部配布
発行元：特定非営利活動法人 震災リゲイン
発行人：相澤久美 編集人：内田伸一
編集部：〒106-0044 東京都港区東麻布2-28-6
Tel：03-3584-3430 Fax：03-3560-2047

第44号

みちのく潮風トレイルを歩く 第10回

Walking on Michinoku Coastal Trail

「みちのく潮風トレイル(MCT)」は、2019年に誕生した長距離自然歩道／ロングトレイル。青森県八戸市から福島県相馬市まで東北太平洋沿岸の1,000キロ超に及ぶ、自然と町を繋ぎ「歩いて」旅をするための道です。東北の復興と振興を後押しするため環境省が敷設し、4県28市町村、市民が協働しています。次代への願いが込められたこの道は、どんな風に育っていくのでしょうか？ 実際に歩いたハイカーの声をお届けします。



①海とともにあるロングトレイル(岩手県大槌町)

なぜ歩いたか

とあるオンラインイベントで名取トレイルセンターのセンター長の話を聴き、初めてトレイルや、みちのく潮風トレイルの事を知りました。

講演の中で、「いい大人」のセンター長があまりに楽しそうにお話されるので、こんなにも大人を夢中にさせるトレイルとは何なのかと興味を持ち、モノは試しに少しだけ歩いてみようかなと思ったのがきっかけです。

歩いている間に印象に残ったこと

数多くの思い出の中で「分ける／違う」ことへの発見がありました。1,000キロ以上、30近い市町村を歩いて繋ぐと、そこには行政区の様な明確な分け方はなく、その土地で暮らす皆さんの文化、自然・景色は緩やかに、時に海の色は劇的に変わっていくのが印象的でした。

また、食に関しては、港ごとに違う牡蠣やワカメの味があつたりと、そのバラエティの豊富さに驚かされました。



あるよる〜

東北を
歩いて
応援!



今回のハイカー

濱口 哲さん(宮城県名取市在住)

スタート：2021年5月29日 福島県相馬市(南端)

ゴール：2022年10月2日 青森県八戸市(北端)

歩き方：夫婦ふたりで複数回に分けて1年半歩きました。合計65日(テント泊はせず)。

その後：いちハイカーとして、みちのく潮風トレイルに続く「ふくしま浜街道トレイル」にチャレンジ中。また、名取トレイルセンターのグリーンメンバー(ボランティアメンバー)として、地域の清掃活動・植樹活動などに参加しています。

ただ唯一同じだったのは、出会った地域の皆さんが本当に優しくったという点です(照れ屋度合いの違いはあれど)。その場面場面を思い出す度に涙が出るほどです。本当にお世話になりました。

歩き終わって何を思う

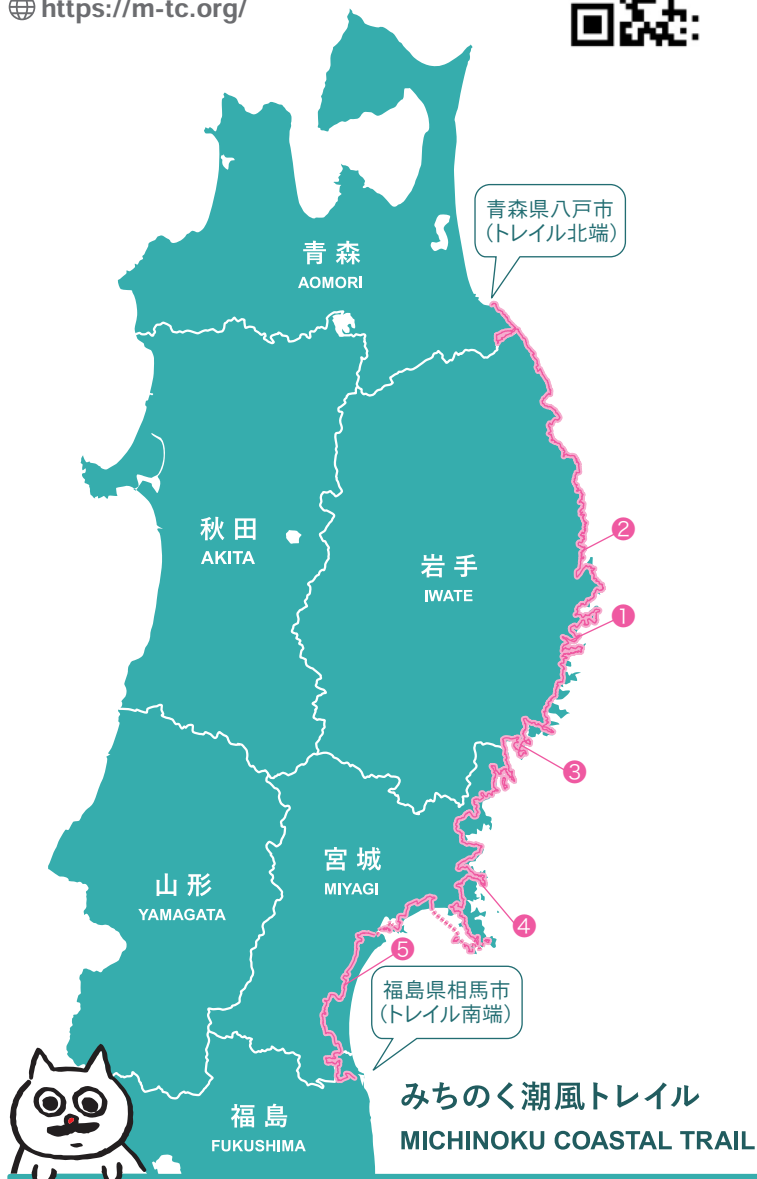
当初、もし歩き終わったら「ゴールした優越感」みたいなものを感じるのかなと思っていましたが、実際に歩き終わると、今歩いている(みちの途中にいる)ハイカーへの憧れを強く持っている自分がいます。

(⇒次ページに続く)

みちのく潮風トレイルを歩こう！

詳しくは▶NPO法人みちのくトレイルクラブ

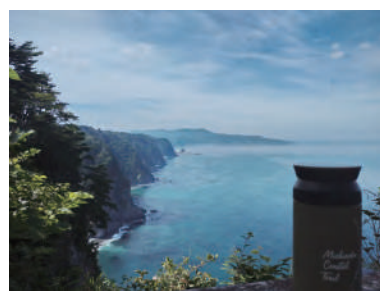
🌐 <https://m-tc.org/>



みちのく潮風トレイル憲章

4県28市町村を貫く「みちのく潮風トレイル」を多様な人々の間で共有するために策定されたこの憲章は、なぜこの道が生まれ、何のために未来に繋いでいこうと願うのか、の思いや理念が記されています。

1. 美しい風景と風土を楽しむ道とします。
2. 地域に暮らす人々とこの地を訪れる人々との間に心の交流が生まれる道とします。
3. 自然の優しさと厳しさを胸に刻む道とします。
4. 震災をいつまでも語り継ぐための記憶の道とします。
5. 豊かな自然・文化を次世代へ受け継ぐ道とします。
6. 歩くことを愛する全ての人々を歓迎し、皆で育てる道とします。



②海のアルプスを臨む (岩手県宮古市)

(⇒前ページの続き)

「今どこを歩いているんですか？ えーそんな出会いがあったんですか!」「いーなーその季節の景色見たかったな!」そんな感じです。

私たちは、1年半の間ずっとこのトレイル(東北太平洋沿岸のみち)のことを想って生活していた事もあり、歩き終わった今も生活の一部、故郷のような感覚を持っています。ニュースで歩いた地域が取り上げられるたびに、楽しい内容であれば自分事として嬉しく思い、心配な内容であれば優しい声をかけてくれたおばちゃんは大丈夫だったろうかと想う、そのような日常です。

自分の住んでいる土地が誰かにそんな風に想ってもらえたら良いなと、道に落ちていたゴミを拾い、大きなバックパックを持っている旅人に挨拶する。そんな簡単な事を繰り返しながら日々の感謝を忘れずに過ごしていきたいと思っています。



③まず避難は高い場所へ (岩手県陸前高田市)



④地域の方とハイカーが繋がるメッセージボード (宮城県石巻市)



⑤長く続く道と、どこまでも続く青い空 (宮城県岩沼市)

読者プレゼント

以下ご記載のうえ、本紙最終ページ下に記載の編集部宛(ハガキ/Fax/E-mail)にてご応募ください。

- ①郵便番号・住所・名前・電話・性別・年齢 ②よかった記事 ③ご感想・ご意見 ④本紙をどこで手に取りましたか？

みちのく潮風トレイルData Book 3名

提供：NPO法人みちのくトレイルクラブ

同トレイルを歩く上で役立つ地点情報を満載。



※2023年10月11日締切。当選発表は発送をもって代えさせていただきます。また個人情報はこの発送以外に使用しません。



文＝河野宏樹

1974年広島県広島市出身。NPO法人これからの学びネットワーク 代表理事。NPO法人環境パートナーひろしま 理事長。羽黒山伏。

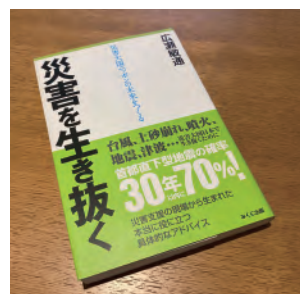
私が災害教育という言葉をはじめて聞いたのは2000年初頭のことです。静岡県にあるホールアース自然学校で自然体験活動や環境教育に従事していた頃でした。その頃のホールアース自然学校の代表は広瀬敏通さんで、何の文脈だったか「これからは災害教育が大切だ!」と言っていました。当時は突拍子もなく謎な発言だなと思っていました。しかしながらこの発言は、阪神淡路大震災での支援活動を教訓に、自然体験活動を展開している人たちが災害現場で活躍すること、後の東日本大震災でも被災各地で自然学校関係者が長期的な支援活動に携わったことに繋がっていきました。

当時のこの一言は広瀬さんの中では明確なビジョンのもとに出た言葉だったのだなと、今となっては思います。そして、広瀬さんが東日本大震災のときに立ち上げたボランティア団体「RQ市民災害救援センター」は「一般社団法人RQ災害教育センター」へと進化し、脈々と災害教育という言葉を引き継いでいます。

災害教育という言葉を初めて聞いた頃の自然学校では、全国各地にその活動を広めるために数多くの研修を実施していました。そのため、自然体験活動の中にある暗黙知をなんとかして形式化しようとしていました。具体的には技術的なことを文章化し体系的なマニュアルをつくることを通じて「見える化」を進めるような作業です。このことは自然学校

という活動を一般化し広める反面、直感や感覚的なことから発生する暗黙知を軽んじる結果にもなり得ました。しかしながら、その後の大きな災害は、こういった形式知で構成されたものだけではなく、改めて暗黙知でできあがる世界の重要性を思い出させるものでした。全国の自然学校の仲間が集まり、災害現場ですぐに活動できる理由のひとつに、その活動に伴う暗黙知の共有が挙げられます。多くの言葉を重ねなくても成立するコミュニケーション、一刻一刻と変化する現場への適応は暗黙知の共有があるからできることです。災害教育という言葉のもとで繋がっている自然学校のネットワークは、このような長年の学びや経験に支えられて成立していることを、災害現場に関わると実感します。

広瀬敏通さんの著書『災害を生き抜く』
(みくに出版、2014年)



一般社団法人RQ災害教育センター

🌐 rq-center.jp

3.11 伝承ロードを訪ねて

記憶を
受け継ぐ

第10回・たろう観光ホテル (岩手県宮古市)



文＝多勢太一(一般社団法人陸前高田市観光物産協会)

千葉県船橋市生まれ。大学卒業後は都内の人材企業で法人営業の仕事に1年半従事。2020年9月に地域おこし協力隊として、岩手県陸前高田市に移住。現在は(一社)陸前高田市観光物産協会で「高田松原津波復興祈念公園パークガイド」や、同市における「みちのく潮風トレイル」の振興に携わる。

連載10回目の今回は、岩手県宮古市田老地区で津波遺構として保存されている「たろう観光ホテル」についてお伝えします。

たろう観光ホテルは、1986年に建設された6階建てのホテルで、高さ17メートルを越える東日本大震災津波によって4階まで浸水し、1階と2階は柱のみが残されています。

私は「みちのく潮風トレイル」の宮古ルートを歩いている際に、たろう観光ホテルを直接目にしました。1・2階は柱だけが残っている一方で、上層階の外壁や窓ガラスは綺麗に残っており、普段の生活では見慣れない建物の外観は、まるで津波の威力と自然災害の恐ろしさを訴えているように感じました。現在は一般社団法人 宮古市観光文化交流協会による「学ぶ防災ガイド」を利用することで、館内の見学と津波襲来時の映像の視聴が可能です。津波が押し寄せる様子の映像はホテルの6階でのみ公開されており、津波の恐ろしさや教訓を学ぶことができます。外観を眺めるのも良いですが、尊い命を守る備えに繋げるためにも、ガイドサービスを利用されることをおすすめします。

ただ、自然は私たちに牙を剥くだけではありません。三陸の海、山、川などの豊かな自然は私たちに恵みをもたらし、古くから人々は自然の「恵み」と「脅威」と共存して生活を育んできました。現在は、豊かな自然

がもたらす美味しい食をはじめ、海とともに暮らしてきた歴史を感じられる各地の伝統芸能、海沿いを歩くトレイルハイキングなど、様々な形で三陸の自然や文化に触れることができます。

三陸は昔から自然の「恵み」と「脅威」と共生してきました。三陸だからこそ、この2つを同時に体感することができます。是非一度三陸にお越しただいて、防災・減災の教訓を学ぶとともに、三陸ならではの食や自然・文化を五感で感じていただけたら幸いです。



津波遺構 たろう観光ホテル

📍 岩手県宮古市田老野原80-1

※「学ぶ防災ガイド」の詳細・申し込みは以下参照。

🌐 <https://kankou385.jp/spots/manabubousai/>

3.11伝承ロードの詳細は▶一般社団法人3.11伝承ロード推進機構

🌐 www.311densho.or.jp

行って
みよう

支え合う
ために

被災地支援の進化 ～支援の個人的記憶を通じて～

第1回・1999年台湾大震災：震災支援デビューを海外で



私の最初の被災地支援経験は海外でした。1999年9月21日、台湾中部で巨大地震が発生、2444名の死者・行方不明者を出す大災害となりました。翌日、全国社会福祉協議会（全社協）総務部にいた私は事務局長に「明日から台湾へ行って災害の様子を録してこい」と命ぜられました。当時、国際部の職員もパスポートを持っておらず、海外旅行ばかりしていた私に白羽の矢がたったのでした。

発災2日目の外国の被災地入りということで、途方に暮れた状態で台北へ飛びました。全社協のアジア社会福祉従事者研修事業の修了生が十数名台湾におられたため、彼らの日本語を頼りに現地入りし、車で南下しました。同行された修了生の皆さんも被災地に入る経験など初めてで、誰もが不安に満ちた道中でした。途中には十数階建ての高層マンションが横倒しになっているなど、忘れられない光景として今も頭に焼き付いています。

震度7相当を記録した震源地近くの街では、軍隊と宗教団体が懸命な救助活動を行っていました。訪問した福祉施設では、辺りには棺桶が並び、安否確認まただ中にもかかわらず、日本からよく来たとお茶を出されてもてなされたことが忘れられません。李登輝総統（当時）の視察にも出あいました。私に出来たのは、訪問した福祉施設に日本から来たというメッセージと話を聞いて写真を撮ることだけでした。帰国してすぐに支援のための委員会を組成、多くの募金が日本国内の福祉関係者から寄せられ、2か月後には再度

文＝園崎秀治（オフィス園崎）

オフィス園崎代表。27年勤務した全国社会福祉協議会を2021年に退職、独立。多様な災害支援関係者との支援体制構築、防災・減災活動や、ボランティア・NPO・福祉専門職等による支援に関わり続ける。

www.officesonozaki.net



その支援金をもって台湾に訪問、被害のあった福祉施設へ届ける役割を果たすことができました。

まだ1996年に軍政から解放されてわずか3年という台湾は今とは全く状況が異なっており、公共施設である学校などの建物の倒壊が目立ち、民間より公共の建物の作りが弱いという政治的な問題が見え隠れする現状も目の当たりにしました。

被災直後に被災地に足を運ぶことの意味の大きさ、大きなネットワークが被災者を支えることができることを実感した私の支援の原体験がここにあります。20年後に国際部の仕事で台湾を再訪し、当時の支援経験談を交えて日本の災害支援について国際会議で話をするようになることは夢にも思いませんでしたが、この1999年の経験は間違いなく私のライフワークの端緒となる出来事でした。

編集後記

近年、梅雨から秋にかけて日本各地で水害の発生が目立ち、今年もすでに九州各地や山口県、秋田県などで被害がありました。被災された皆さまにお見舞いを申し上げますとともに、亡くなられた方々やそのご家族に心よりお悔やみ申し上げます。一方で先日、2016年の熊本地震による被害で一部区間の運休が続いた南阿蘇鉄道が、この夏ついに全線運転再開との知らせにふれました。少紙連載「3.11伝承ロードを訪ねて」で多勢太一さんが今回書いてくださったように、私たちは自然の恵みと脅威の双方と共生しています。起こり得る災害にいかにも備え、起きてしまった際はいかに支え合えるかについて、少しでも役立つ情報を知り、発信していければと考えています。（内田伸一）

震災リゲインプレスとは

東日本大震災の翌年、2012年創刊。震災をめぐる復興・支援・防減災の備えなど様々な情報をお届けする季刊フリーペーパー。創刊10年目を迎えたいま、改めて東北の情報を軸にした発信を目指して再スタートしました。過去号閲覧や会員登録ができるウェブサイトもあります。

NPO法人震災リゲイン

理事（五十音順）：相澤久美、内田伸一、大場健一、鬼本英太郎、日下部泰祐、佐々木豊志、関口威人、高木伸哉、田北雅裕、福井一朗
監事：渡部宏幸 | 編集：相澤久美、内田伸一 | デザイン：八木直子

NPOの
会員に
なる

あなたの力を貸してください 震災リゲインNPO会員募集！

NPO法人震災リゲインは、活動に賛同して下さる会員を募集しています。会費は各地への『震災リゲイン』送料等に充当させていただき、会員の皆様にも同紙をお届けします。周囲の人に手渡し読んでもらうことで、みんなで災害への備えを促進し、復興過程の被災地を支える活動に繋がしましょう。各種ご質問は下記へ。

ご入会は⇒ shinsairegain.jp

会費は賛助会員／正会員一口250円／月から、
団体会員一口2,500円から。詳細は上記サイトから
「会員登録・寄付」をクリック。

【ご寄付のお願い】活動継続のためのご寄付も随時受け付けています。
ゆうちょ銀行 記号番号00160-6-387514 口座名：トクヒ シンサイリゲイン
※他行からのお振込：店名 0一九（ゼロイチキョウ）店名019 当座0387514

ご意見、情報もぜひお寄せください shinsairegain.jp

特定非営利活動法人 震災リゲイン『震災リゲインプレス』編集部宛

〒106-0044 東京都港区東麻布2-28-6

info@shinsairegain.jp ☎03-3584-3430 FAX 03-3560-2047



震災リゲインプレスは以下の協賛により発行しています。

